巡見報告②

秩父観音霊場と秩父事件の史跡を訪ねて

蕨　　由美

私たちの会で市内を歩くとき，あちこちで秩父三十四番巡礼供養碑を見かける。庚申塔や出羽三山碑と並んで，私たちに馴染みの深い石碑の一つである。萱田の長福寺には安政５年の巡礼碑があり，市内の農村部では今も昔も秩父巡礼が盛んなようであり，秩父講の碑は，地域の女性たちの信仰と親睦の証として現在も誇らしげに立っている。

また，これまでに会で訪れた館山の那古寺や下総の滑川観音には，他の寺々にはない親しみやすい独特の雰囲気があった。聞くところによると，坂東三十三観音の札所であるという。庶民の信仰が今も息づく札所巡り，まして秩父の美しい自然に抱かれた秩父三十四観音霊場には，心ときめく期待があった。一つひとつ趣の違う秩父の札所を訪ね，できれば古代の和銅遺跡や明治期の秩父困民党の史跡も廻りたいということで，今年の旅行は秩父と決まった。

平成９年５月24日土曜日。天気は曇り後雨という予報の中，18名を乗せたバスは，７時30分勝田台を出発し，関越道から花園ＩＣを経て，一路秩父路へと入って行った。

１　和銅遺跡の岡に登る

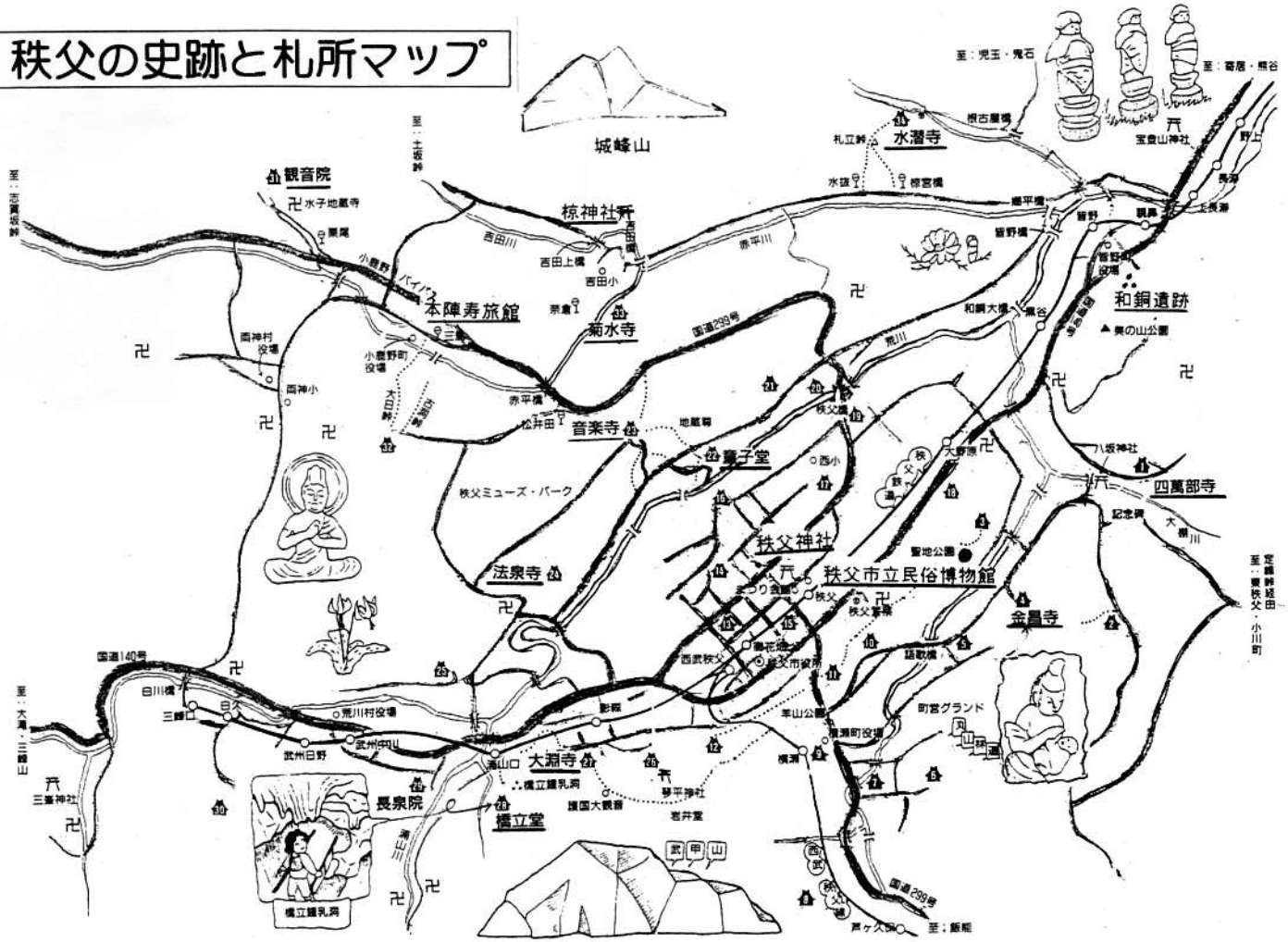
宝登山や長瀞などの景勝地を通って，バスは荒川を上り，美の山山麓の聖神社に着いた。ここ黒谷祝山で産出された自然銅を慶雲５年に，元明天皇に献上したことに由来する神社で，そのときの自然銅が御神体であるという。

社の横の林道から和銅沢添いに歩き，「和同開珎」を型どった大きなモニュメントのある園地に出た。「日本通貨発祥の地」と記されたこの碑の横に説明板があり，この山は秩父古世層と第三紀層の合わせ目で，たまたま自然銅が露出していたのを，渡来人が発見し，献上したのだという。

和銅遺跡跡にて

山の上に露天掘りの跡があるというので，登ってみた。暗青色の岩肌の鋭く切れた小さな谷がその跡であろうか。怖い思いをして登った谷の上に「和銅開寶之古跡」と刻まれた石碑があ

秩父の史跡と札所マップ



った。

ところで，最近は「わどうかいほう」ではなく，「わどうかいちん」と呼ぶ。佐倉の歴博の先生の話では中国貨幣史の考証により，「和同開珎」は「同」も「珎」もこの古碑のような「和銅開寳」の略ではないからということである。また，実際に鋳造された「和同開珎」の地金は，山陰地方の産と同定されたという。いずれにしても辺境であった秩父が，日本史にその名をとどめた第1ページの出来事だったことは確かである。

和銅遺跡から下りる途中，とうとう雨が降り出した。駐車スペースがなかったので，バスを昼食の店「栗助」に回送してしまい，雨の国道140号を歩くことになってしまった。よく歩いたせいか，質，量共に豪華な栗飯御膳がとてもおいしかった。

2　先ずは札所第1番の四満部寺から

秩父は新生代第三紀（3～6千年前）の造山運動によりできたお盆の底のような山国で，古代から山岳宗教が盛んであった。10世紀には西国の，鎌倉時代には坂東各33か所の札所が設けられ，秩父の札所も室町時代に成立していたという。33という数は，観音経の観世音33化身に基づくが，西国，坂東，秩父併せて百観音とするため，秩父のみ34か所となっている。秩父は関東平野から見ると，山なみの向こう「彼岸」の地だった。それでも江戸時代には，足の便がよく，風光明媚な秩父札所巡りは大変な人気だったようで，午年には江戸での出開帳もしばしば行われたらしい。

その34か所の第1番の札所が，熊谷から荒川沿いに秩父路に入って最も手前にある四満部寺である。必要な人はここでまず納経帳を整える。本尊は行基の刻んだという聖観音で，寺の名は，性空上人の弟子幻通が供養のため4万部の仏典を読み，経塚を築いた故事に由来するという。

門前には巡礼宿のおもむきを伝える民宿があり，千社札の貼られた山門がいかにも札所らしく，多くの人を招いてくれていた。本堂は元禄時代の建立で，江戸期の装飾の多い入母屋造りである。右隣に大施餓鬼を行う施食堂があった。

第1番の札所・四満部寺

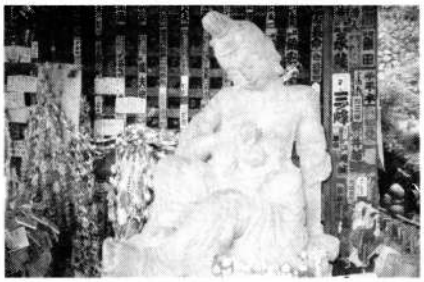
山門のそばの新しい経塚の復元の碑には，フランス近世史が専門でありながら，名著「秩父事件」を書かれた井上幸治氏の碑文が刻まれて

あり，故郷の秩父を愛された先生の人柄に触れたように思えた。

3　石の協奏曲・4番金昌寺

大きなわらじの掛かった山門をくぐると，赤いよだれかけを着けた六地蔵がシャクヤクの花に埋もれて私たちを迎えてくれる。ふと坂道の先に目をやると，そこにはさまざまな仏たちが集う石仏の世界だった。寛永元年（1624）に住職が千体仏安置の発願をして以来，その後も信者の寄進が続き，1400体の石仏が祈りの谷を作っていた。

石仏に導かれてたどり着いた山腹の観音堂の回廊には，「マリア観音」とも通称されている美しい子安観音が，たくさんの女たちの願いを記した絵馬に囲まれて，赤子に乳を含ませていた。寛政4年（1792）江戸の商人吉野屋半左衛門が寄進した像で，歌磨の絵を基に刻ませたという。



金昌寺の子安観音像

子安観音は，江戸時代以前には日本になかった観音像である。キリシタン禁教後，子供を抱かせた白磁の観音像が中国から渡来し，隠れキリシタンの心のよすがとなり，後の平戸焼のより柔和に微笑む観音像が普及すると，仏教徒のうちでもその慈愛に満ちた姿を子育観音に刻むことが流行したという。宗旨を超えた普遍の母子愛をこの像に刻んだ石工はいったい誰なのだろう。田中澄江の本に，秩父は昔から争いに敗れた者が逃げ込みやすく，キリシタンの潜伏者も多かったと書かれている。このように大胆に表現された像も，秩父なら許される何かがあったのだろう。

4　明治大正の暮らしを伝える秩父市立民俗博物館

明治の大宮小学校と大正の秩父駅舎の木造建物を移築復元したユニークな博物館で，近代の産業と暮らしを伝える民俗資料がぎっしりと詰まっている。山国ゆえに稲作では立ちゆかないこの秩父の繁栄を支えたのは，養蚕と織物であり，また，人々の心のよりどころとしては，山岳信仰の中心になっている秩父神社の祭礼と観音霊場のにぎわいであった。この風土の持つ光と影が独特の民俗の営みを生み，明治の秩父事件を生んだともいえる。

時の政府の厳しい経済政策により生糸が暴落し，高利貸しの餌食にされた負債農民によって明治17年に秩父困民党の一斉蜂起が起こった。この事件を伝える秩父事件のコー

ナーは，打ち壊しの斧の刃跡の残る高利貸しの家の大黒柱や自由党員として蜂起を指導し，事件後北海道に潜伏した井上伝蔵の木刀などの貴重な資料が展示されていた。

憲法も国会もなく，民権と国権が激しく対立していた時代，5千人もの農民軍が立ち上がり，国軍の力による鎮圧の後「暴徒」として処分された秩父事件，この事件の意義の見直しを視点に開設されていると思われるコーナーであった。

5　知々夫神と妙見信仰を祀る秩父神社

秩父の中心地である大宮郷，その核ともいえるのが12月の夜祭りで有名な秩父神社である。武甲山を遥拝するこの地に知々夫神を祀った社が，和銅献上によりその霊験が讃えられて宮社となり，中世以降は北辰妙見が習合し，明治維新の神仏分離までは「妙見様」と崇められていた神社である。妙見信仰は，平将門或は将門と戦ったという平良文の血脈を誇る関東武士に広く信仰されたが，ここ秩父も将門伝説が多く眠っているところである。

天正20年（1592）に家康の寄進により建立された本殿に，天和2年（1682）に幣殿と拝殿が増築された。その際施された左甚五郎の彫刻は，「子育ての虎」「つなぎの竜」「北辰の梟」などが有名である。この「北辰の梟」は，今は学問成就の御守りのキャラクターになっていた。

6　夕雨にけむる27番大淵寺と28番橋立寺

秩父の札所は，里の寺より修験道の名残をとどめる山裾の寺が多く，尾根通しの参拝道も残っており，26番岩井堂に続く27番大淵寺も武甲山に近い影森の山寺である。禅宗らしくよく手入れされた境内の道を登ると，再建なった月影堂が木の香も新しく建っていた。「夏山やしげきが下の露までも心へだてぬ月の影もり」と巡礼歌に詠われた風雅なたたずまいである。展望の良い広場にある「観音遥拝石」に導かれて杉木立ちを見上げると，尾根に建つ護国観音の像を望むことができた。昭和10年の開眼で，関東三大観音の一つであるという。雨にけむるその姿は，幽玄の世界の化身のようであった。

28番橋立寺は，切り立った岩壁を背負うように建つ寺であった。札所にしてはやや広い駐車場がある。奥の院の橋立鍾乳洞見学のバスのためであろう。橋立鍾乳洞は，旧石器時代から人の生活が営まれた遺跡であり，洞に入ることを穴禅定といって修験道の行場でもあったらしい。童心に帰って私たちも入場料を払い，鍾乳洞探検を試みる。かがんでやっと通れるトンネルを抜けると，高い天井から鍾乳石が垂れ下がる空洞に出たり，

垂直の梯子を上り下りして，さまざまなネーミングの石筍の林立を楽しんだ。

洞窟を出て，本堂をお参りする。馬頭観音を本尊とするのは，百観音でもここと西国に一寺あるのみであるという。物を運ぶ馬は，人々の暮らしになくてはならないものであり，馬頭観音に寄せる昔の人の思いは深いものがあった。本堂の右手には，駿馬の銅像や親子の白馬の木造を納めた厩が奉納され，ひいきの競争馬の回復や交通安全を祈願する絵馬が沢山かかっていた。

雨模様の夕べの空はしだいに暗くなる。第1日目の見学はここまでとし，近くの「御宿竹取物語」で憩いの一夜を過ごすこととした。

7　武甲山を望む陽光の札所29番，24番，22番を巡る

早朝，五月晴れの朝日に起こされ，それぞれ朝食前の散歩に出る。私たちは，近くの29番長泉寺にお参りする。人気のない竹林に囲まれたお堂にも，射るような朝日がさして，堂内の欄間に掲げられた北斎の「桜花図」の板絵もよく見ることができた。

朝食後再びバスに乗って荒川沿いに少し下り，段丘の長閑かな田園沿いの道を行く。24番法泉寺は，117段のすり減った階段を登った所にあった。村の小学生が日曜の朝の清掃奉仕に汗を流している。江戸中期に建てられた本堂は，仁王門と兼用と思われる面白いデザインであった。そのきざはしに立ち，記念写真を撮る。まぶしい朝日の逆光の彼方に，秩父の名峰武甲山が石灰岩採掘の跡も生々しく座していた。

バスはまた田園の中を走り，高い台座に座った地蔵像に導かれるように右折すると，小径の先に22番の童子堂の山門があった。門の格子の中にはとてもあどけない作風の仁王様「童子仁王」がいらっしゃる。10世紀に天然痘から子供たちを救った観音様の功徳を讃えて「童子堂」と通称されているこの観音堂は，迦陵頻迦などの彫刻の華やかなお堂で，江戸時代に建てられ，大正時代にここに移されたという。案内板によると，中世城館の遺構がこの付近に残っているというので，堂守の方にお聞きして畑の中の土塁や堀を訪ねてみると，堀跡の菖蒲に武甲山とハープ橋が美しく映えて兵どもの夢はるかなたたずまいであった。

第22番の札所・童子堂

8　秩父事件の舞台・音楽寺と小鹿坂峠

小鹿坂峠を背にした23番音楽寺は，正面に武甲山，眼下に大宮郷と荒川の一筋の流れを望むもっとも眺望が雄大な札所であり，秩父事件のクライマックスの舞台として誇り高き秩父農民の歴史を語る岡であった。

9世紀に慈覚大師がこの景観にうたれて聖観音像を刻み，山路で安置場所を探していたとき，子鹿が現れて大師を先導したという伝承と，13人の聖者がこの地の松風の音を聞き，菩薩の音楽と感じたという伝説を持つお寺で，江戸中期建立の御堂とこのお寺の象徴ともいうべき梵鐘が柔らかな音色で私たちを迎えてくれる。この鐘は音色もさりながら，鐘の周りに鋳出された六観音の姿が美しく，第二次大戦時にも供出を免れた名鐘である。

第23番の札所・音楽寺

音楽寺から大宮郷（秩父市街）を望む

1884年11月1日，吉田町椋神社に集結した農民3千人が，翌朝小鹿坂峠を越えてここ音楽寺に到着し，この梵鐘を乱打して遥か足下の大宮郷を目指し，「うしおのごとく」繰り出した。5日の鎮圧まで続く「無政の郷」の出現である。

「われら秩父困民党　暴徒と呼ばれ　暴動といわれることを拒否しない」と刻まれた困民党無名戦士の墓碑がここに建てられた1978年11月，私は初めてこのお寺の岡に登った。その10年前，井上幸治氏が「郷土の屈辱の歴史」ではなく，「秩父事件が自由民権運動の最後にして最高の形態であり，我が故郷の事件であったことを誇りに思う」という志で中公新書『秩父事件』を出版され，来るべき決起百周年に向けて歴史の見直しと記念事業が歩み出しており，また，井出孫六氏の平凡社カラー新書『秩父困民党紀行』が旅への誘いを掻き立てていたころである。

そのとき，私は「吾々は　債鬼の強迫を逃れ　家に老幼をおき　山野を放浪するまでに貧困の極に達した農民を救うため　自らの実力で立ち向かった農民戦士のことを忘れない。……　無名戦士たちに栄光あれ」と記された碑文に改めて共感するとともに，観

音霊場の優しさとあまりにも美しい風景に時の過ぎるのを忘れるほどだった。

時を経ても変わらぬ眺望と鐘の音を味わって，バスで小鹿坂峠を越える。19年前は，困民党の足跡をたどるべく，落ち葉が厚く積もり消え入りそうに細くなっていたこの峠道を歩いた。そのころは峠を越すと，斜面にへばり付くような桑畑や養蚕農家のたたずまいが秩父の晩秋の風情を感じさせてくれていたのだが，今は，この抒情のある峠道は秩父ミューズパークに変わっていて昔をしのぶことさえできず，開発と観光化の進行にただ驚くばかりであった。

9　小鹿野の町と山岳修験道の31番観音院

299号線より小鹿野を抜け，万体地蔵の横を通って観音山の麓でバスは止まる。石の仁王様の納まる仁王門で杖を借り，杉木立の参道を登る。句碑や丁石を見ながら中腹まで上がると，大きな崖を落ちてくる滝が見えてきた。滝の右手には観音院本堂が建ち，滝の左横の岩壁には沢山の爪彫りの磨崖仏が磨滅しそうな姿をとどめている。国東半島の修験道場に似た風景である。奥の院まで沢山の石仏が岩窟に並ぶ岩場の道をたどると展望台があり，さらに岩肌の細い尾根筋に道がついていて，観音山の頂きに至る修験の山道が続くようだった。

お参りを終えて仁王門の横の売店を兼ねた観音堂に立ち寄ると，堂守の田中孝宗さんが記念の巡礼印を表装する軸先に微細な文字で経文を彫っておられた。僧籍の方ではなく，この観音様に帰依して重い糖尿病から命を助けていただいた感謝のために，米粒や軸先に文字を彫り，観音堂を守っておられるとのことだった。「念」の一字を彫った米粒を御守りにいただいた。「念ずれば花ひらく」とその台紙に田中さんの心のうちが記されてあった。

バスはまた小鹿野の町へ戻り，本陣寿旅館で昼食とした。築350年の代官の間を見学した後，趣向を凝らした代官料理をいただいた。この旅館には，困民党参謀長で長野県佐久からこの蜂起に参加した菊池寛平がしばしば泊まった部屋もあり，後に井出孫六氏が秩父事件をテーマにした「峠の軍談師」の執筆に，この部屋を使用したとのことだった。

10　吉田町の33番菊水寺・椋神社を回る

秩父盆地の北東から南下したバスは，時計回りに廻って北上し，いよいよ城峰山の麓の吉田町の33番菊水寺へと進む。菊水寺のお堂は文久年間（1861～64）再建の，入母屋造りで，本尊が間近で拝めるように土間が広くしてある，大きな玄関のような堂宇であ

った。欄間には「子がえし」「孝行和讃」の大きな絵入りの額が掲げられていた。前者は間引きの戒め，後者は我が子をさしおいて姑の老婆に乳を与えるという題材で，どちらも仏の教えを説くために当時の常識に対して逆説的な勧善懲悪を示している。それ故に，内容的にも強烈な印象を受けた。

吉田町は，中世武士団秩父氏の館があった所で，秩父事件発祥の椋神社のある地である。椋神社は，日本武尊東征の際投げた剣がこの地で道案内の翁に変じたという伝承により，猿田彦神ら5神を祀る式内社で，10月の秋祭りのとき，各耕地ごとに手製のロケット「竜勢」を打ち上げることで有名である。

ここが，明治17年の秩父事件の組織的活動の集結地であるという歴史的な場所となったことを，井出孫六氏は「椋の宮は，古来，その社格からして妙見秩父神社に次ぐ地位を保ち続けてきた聖なる場所であり，それ故にこそ，一斉蜂起のスタートは，この社の境内に定められた。」と述べ，その前年の秋から百姓の生活はハレの祭りどころではないケの連続であり，その蜂起を「竜勢など比ぶべきもない強烈なハレへの願望が，蓄積許容の限度をこえた」故と表現している。

森に囲まれた高台に椋神社はあった。祭りのとき，或は明治17年のあの晩に何千人もの人が集まった社とは思えないほどひっそりとしている。鳥居の下で社を守っていたのは，狛犬ではなく，リアルな姿の2頭のオオカミの石像であった。そういえば，絶滅した日本狼が秩父のどこかにいるということを聞いたことがある。

神社の真向かいには北斗妙見の武甲山が，そして，神社の裏の竜勢を打ち上げる広場の向こうには，平将門が隠れていたという城峰山が望める。また，境内の一角には，秩父事件百周年を記念して，たいまつをかざし行く手を示す雄々しい青年像が建立されていた。

椋神社の見学を終え，バスは赤平川沿いの道を下り，日野沢川の合流点からまた川沿いの道を遡って34番水潜寺を目指す。秩父は，無数の谷川が放射状に盆地の底へ流れ込み，川沿いに道と耕地と呼ばれる集落が細くのびて山へと消えている。車は峠を越せずに，川沿いを合流点まで迂回して尾根の向こうへ行かざるをえない。しかし，車社会になる以前，巡礼も山の民も自由に川を遡り，峠を，そして，県境さえも越していた。秩父には沢沿いの細道と峠の織りなす社会があり，札所を巡る巡礼たちも，耕地を組織化する困民党のオルグもひたすら歩いた。

井出孫六氏は，信州佐久の活動家の秩父困民党への関わりと蜂起後の佐久への転戦の足跡を記した覚え書きに「峠の廃道」と題している。33番札所から34番への札立峠の尾根道も今はハイキング用に残るのみとなっているが，山深い峠道は開発よりも，静かに人の行き来を拒みつつ，廃れ行く道を望んでいるのかも知れない。

11　結願の34番水潜寺，そして旅の終わりに

旅の最後に，秩父34か所と四国・西国百観音の結願寺である水潜寺をお参りする。札立峠から下りる巡礼道を逆に登ると，苔むした石段を六地蔵の石仏が見守っていてくださる。

山を背にゆったりと建つ観音堂は，講を作り，信徒からいただいた供米を売って建てたと文化7年（1810）の古文書にあるという。文字どおり民衆の寺らしく，また，絶えることのない香の煙，たくさんの千社札・千羽鶴・杖，百観音霊場の砂を集めたお砂踏場など，いかにも結願のお寺であった。

外陣の軒下に立派な句額が奉納されている。秩父は，連歌の盛んなところであったという。北海道に住む森山軍治郎氏は，蜂起の敗北後北海道に逃げのびて，妻子にさえ本名を明かさなかった困民党幹部の井上伝蔵について調べていくうち，伝蔵が北海道で俳句の作品を多く残していることを知り，秩父の俳諧について徹底して調査を行った。その資料のほとんどは，寺社の奉納句額で，『民衆蜂起と祭り』という著書には，秩父だけで47枚の句額をリストアップしている。水潜寺の句額は，このリストで，最も新しい昭和29年のものらしい。

森山氏は，伝蔵の生き方，そして，秩父困民党蜂起の原点を，俳諧を歴史資料として探ろうと試みている。氏の調査によれば，地芝居や座の文学・俳諧を中心とした民衆文化の高揚期は，幕末の文化文政期から明治20年ころまでで，秩父の民衆の心は維新によって変わったのではなく，近世的な伝統意識がより開花していったと見ている。

秩父事件は，井上幸治氏が明らかにした「秩父農民の経済的に困窮していた社会的背景」と，井出孫六氏がその足跡を追い続けた氏の故郷の「佐久の自由党の闘士たちが説いた民権思想」に加えて，森山氏の探ろうとした「伝統文化と祭りを共にする民衆の精神的エネルギー」に触れることにより，より深く理解できるのであろう。

本堂の右手は，岩窟と石仏の集う清めの場となっている。清水の湧き出る岩屋は，結願に当たり身を清める「水くぐり岩屋」と呼ばれていて，旅の終わりにふさわしい所で

あった。

最近奉納されたばかりの三十三観音像に見守られながら，駐車場まで下り道を歩く。三十三観音は，33化身の教えを受けて江戸中期に成立したものであると聞くが，延命観音，魚籃観音など知っている観音様や初めて知る観音様もあり，今なお息づく庶民信仰が新たな展開を続けていることを感じながら興味深く拝見した。

第34番札所・水潜寺参道

我が会の旅行で4年前に信州の「塩の道」を歩いたとき，観音原の百観音，前山百体観音の石仏群に観音巡礼に寄せる庶民の厚い願いを感じた。秩父のごく一部の霊場をしかもバスで廻っても，その道の険しさと距離感が分かる。百の霊場を廻ることは，当時の人々には想像を絶することであった。それ故に，叶わぬ思いをこのようなミニチュアの観音霊場に託したのであろうが，それでも四国88か所と同様に，心身の再生を願って実際に巡礼した多くの女性たちがいたことに驚かざるを得ない。

秩父は，関東平野の中で特異の地形を持つ故に独特の景観の中で，歴史・民俗・宗教を育んできた。その姿を知るには，今回の旅はあまりにも短く，札所も34か所のうち11か所を廻ったにすぎない。いつの日か廻り残した札所や峠の道を歩いてみたいと思いつつ，結願の寺・水潜寺を後にした。

参考文献

『秩父三十四カ所』　平幡良夫著　古寺巡礼シリーズ3　満願寺教化部

『秩父事件』　井上幸治著　中公新書

『秩父困民党紀行』　井出孫六著　平凡社カラー新書

『民衆蜂起と祭り』　森山軍治郎著　ちくまぶっくす